

糖尿病患者の「生きる」ことの心理臨床学的研究

A Research on How Diabetes live their lives
from the Standpoint of Clinical Psychology

研究代表者：森崎 志麻 (D1)

指導教員：皆藤 章

研究分担者：大家 聡樹 (D3)・西田 麻衣子 (D3)・高橋 紗也子 (M2)

【研究目的】

我々研究グループはこれまで、「糖尿病を抱えて生きるとはどういうことなのか」を理解することを目的として、糖尿病患者への個別調査面接や天理よろづ相談所病院内分泌内科石井均医師をはじめとした糖尿病患者にかかわる医療関係者との意見交換の場を通して、糖尿病患者を「生きる」ことへの理解を深める試みをしてきた（荒木ら、2007；清水ら、2008；大家ら、2009）。そこから、糖尿病を抱えて生きるということは、「疾病」という枠にくくることのできない、医療と個人の生活が渾然と交じり合ったものであり、それはまさに彼らの「人生」にまで広がるテーマを含んでいると考えられた。

本研究では、これまでの研究で得られた知見をふまえ、糖尿病患者への調査面接や医療関係者との連携をより進め、糖尿病を「生きる」ことへの心理臨床的な理解を深めることを目的とする。また、今年度は特に、調査面接だけでなく、糖尿病患者への心理臨床的関わりについても模索・検討することとした。

【研究経過】

今年度の活動は、①「糖尿病患者との調査面接および心理臨床的関わり」、②「調査面接および心理臨床的関わりの検討」、③「看護師研修会への参加」、④「研究論文の作成」の4つの柱からなった。

まず、①「糖尿病患者との調査面接および心理臨床的関わり」については、X病院における糖尿病患者への継続的な個別調査面接と、Y病院における糖尿病患者への個別調査面接および心理臨床的関わりを行った。

②「調査面接および心理臨床的関わりの検討」については、研究会内における検討会を継続的行ったと同時に、2009年5月には、京都大学大学院教育学研究科臨床教育

学専攻臨床心理実践学講座教授・角野善宏先生をコメンテーターとして検討会を行った。さらに2009年8月には、天理よろづ相談所病院内分泌内科医師・石井均先生をはじめ、糖尿病にかかわる医療関係者を交えてシンポジウムを行った。研究会内での検討会を通じて理解したことを、面接の内容とともに医師に提示し検討することを通して、糖尿病患者に対する心理臨床的理解を共に深めた。

③「看護師研修会への参加」については、2009年8月に仙台で行われた第4回東北糖尿病看護スキルアップセミナー「糖尿病患者の心理を考える」に参加した。看護師とのグループディスカッションや事例検討会を通じて、糖尿病患者に対する看護師の関わりについて理解を深めた。さらに糖尿病患者との面接や検討会で得られた知見を踏まえて心理臨床的視点からみた糖尿病患者の理解を提示・検討することを試みた。

④「研究論文の作成」については、Y病院で行った調査面接から一事例を取り上げ、メンバーで考察を行った。それをもとに、京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要への執筆を行った。

〔研究成果〕

今年度の活動を振り返ると、Y病院における糖尿病患者への調査活動および心理臨床的関わりや、糖尿病患者に携わる看護師学会の研修会における看護師との事例検討など、医療現場での実践により近づいてきたと思われる。これまでの文献研究や調査研究をふまえて、実際に医療現場で糖尿病患者に関わるという心理臨床実践活動に力を注いだといえる。

特に、今年度の研究活動の大きな成果としては、何よりもY病院で糖尿病患者に対する面接の機会を得たことであり、これによってメンバー全員が実際に糖尿病患者に関わる体験をもつことになった。また、前年度までの活動では調査面接という面接構造でお会いしてきたが、今年度から短期ながらも心理臨床的な姿勢で糖尿病患者への面接を行うことができた。

また、京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要への論文執筆を通して、糖尿病患者に対する心理的支援を考えていく際の一つの重要なテーマとなる「関係」を軸にして、医療現場での糖尿病患者への心理臨床的関わりの可能性について論じることができた。

※参考文献の詳細は、本文に記す。

〔研究協力者〕

木下 直紀 (M1)・中川 みず穂 (M1)・藤江 淳史 (M1)・義江 多恵子 (M1)・清水 亜紀子 (京都大学大学院 GCOE 研究員)・根本 眞弓 (大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科)・川端 亨子 (立命館大学文学部)